瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば
年間第二十七主日Ａ年（２０２６年１０月４日）

主任司祭　小西　広志

第一朗読：イザヤ書５章１－７節
第二朗読：フィリピの信徒への手紙　４章６－９節
福音朗読：マタイによる福音書２１章３３－４３節

三つの朗読から

第一朗読にある「良いぶどう」という表現に心を留めましょう。ぶどう畑の主人が植えたのは「選りすぐり」のぶどうでした。しかし、彼が望んでいたのは「ぶどう酒」がつくれるほどのごく普通のぶどうの実だったのです。主人の望みとは裏腹に実ったのは「腐った、酸っぱい」ぶどうでした。

２節の「耕し」「のぞき」、「植え」、「立て」、「掘り」、「待つ」という動詞の連なりに注目してください。

「愛する者」が丹精込めてぶどうを育てていることをこれらの動詞は表しています。ぶどう畑は実に手のかかるもののようです。そのことを示唆するために動詞が重ねられているのでしょう。そして、「主」の「ぶどう畑」とはとりもなおさずイスラエルを示しますから、主なる神のイスラエルへの愛がここによく表されています。「良いぶどうを植えた」は直訳すると「選りすぐりの良いぶどう」の意味だそうです。「良いぶどうが実るのを」は「ぶどう酒やぶどう汁を造ることのできるぶどう」の意味だそうです。ですから、「愛する者」がぶどうを植えて願ったのはごくごく普通のぶどうの実だったのです。しかし、実ったのは「酸っぱいぶどう」でした。これは「腐ったぶどう」の意味で、「悪臭を放つ」という語源に基づく表現だそうです。

第二朗読の「わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たこと」（９節）が響きます。パウロの示したのは、主イエス・キリストに基づく生き方です。主イエス・キリストの生き方、あり方がわたしたちの生きる規範となります。キリスト者はキリストが生きたように生きるのです。

８節の「真実」、「気高い」、「正しい」、「清い」、「愛」、「名誉」に注目してみてください。これは徳目のリストです。特段キリスト教的な徳目ではなく、当時のギリシア倫理において尊重されていた徳目です。パウロは、キリストに結ばれていることを大切にするだけではなく、一般的な徳も大切にするようにと説きます。

キリストが「人間と同じ者となり」（２章７節）という視点から社会や世界を眺めると、「完全な者」（３章１５節）であるためには、この世的な徳目を尊重し、心に留めなければなりません。

福音朗読にある「わたしの息子なら」という主人のことばは切実です。大事な息子を送ってでも農夫たちとの関わりを築きたいぶどう園の主人の思いを伝えています。

今日の福音朗読のあたりに見ることのできる修辞的な構造を探ってみましょう。

A(21:33-40)　もう一つのたとえを聞きなさい(21:33)　(παραβολὴν)

B(21:41)　ぶどう園はほかの農夫たちに貸す(21:41)

(ἐκδώσεται)

C(21:42)　家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった(21:42)

B’(21:43-44)　それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる(21:43)

(δοθήσεται)

A’(21:45-46)　このたとえを聞いて(21:45)　(παραβολὰς)

A、B、C、A′、B′、C′のけいしきになります。そして、AとA′では「たとえ話」、BとB′では「 他の者に与えられる」が共通のキーワードになります。、真ん中の Cでは旧約聖書の引用」が大切になります。

ぶどうの実が実るまでは大変な労力が必要となります（第一朗読）。しかもそれを惜しげもなく農夫に貸し出す主人です（福音朗読）。このあたりに人間に関わり、人間に委ねていく父なる神の姿が表れています。そして、第一朗読でも福音朗読でも、自分たちこそが救われるのだという思い込みが見られます。こういった思い込みこそが、神さまと向き合っていけない原因となっているのではないでしょうか?